保育の見方，捉え方を再認識する試み

今年度の研究テーマ「21 世紀を生き抜くための資質・能力を備えた子どもの育成－保育・各教科等における資質・能力の育成－」のもとに附属幼稚園で取り組んだ「遊びこむ子どもを育てる」は，研究的実践の裏に，研究手法の可視化と研究内容の汎用性を探るものであったと考えている。

研究会に参加する保育者はその性として，子どもが一生懸命何事かに集中する姿，昨日遊んでいたことを今日もさらに工夫しながら取り組み続ける姿を見ると，「子どもの持つ力って本当にすごいな！」と感心する。子どもが誰かを助けたり，「一緒にやろう」と声をかけたりする姿を見ると，参観者はつい「思いやり」「協調性」という言葉が頭に浮かぶ。保育協議では，子どもの姿を追いかけすぎると，「Aちゃんが○○を頑張って（しっかりと等）△△していて・・・。」という風な観察記録から，その子，その場面に限定された議論になりがちであるし，保育者を追いかけると，「B 先生の声かけや支援が素晴らしかった」という賛辞で終わる。保育研究会では，子どもと保育実践者の行動と言葉を見る，記録するということが当たり前になりつつあるが，最後の保育協議の時間になると頻出する「とても勉強になりました」という参会者の声は「何を」勉強したのだろうかという疑問が筆者には常にあった。そしてその勉強したことは明日からの教育活動にどのような知見を与えたのだろうかと。

これまでの附属幼稚園であれば，「遊びこむ子どもを育てる」には「このような活動の中で，子どもの追求する姿を育むことができます」，あるいは「そのために保育者がこのような環境の構成と支援をする必要があります」という提案だけを行っていた。しかし，今回提案するのは，「遊びこむ子ども」の姿を生み出す保育者の行為・言葉にはどのような意図が隠されているのか，それはどのように形成されていくのかを省察するものである。（その裏には，研究会参加者に対して実践の中の何を，どのような基準，構造の中で見てもらうのか，何を学んでもらって，明日からの保育にどのように活かしてもらうのかというメッセージがあった。）普段の保育活動の中で，何気なく行っている行為を意識する，さらにはメタ認知（自分が今何を考えて判断・行動しているかを認識）することによって，保育の方法を子どもへの思いを基盤においた直感の蓄積である経験値ではなく，みんなで共通理解できるキーワード（「意味付け」「価値付け」「力付け」）によって紐解いていくことの重要性を提案していたと考える。

新しい幼稚園教育要領にも「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」が明確に記載されるようになった。小学校教育へのなだらかな移行を前提とするこの姿は，小学校教育の前倒し的な意味合いが全く無いわけでは無いが，幼稚園教育に対する厳しいメッセージではなかろうか。これを受けて，当然その姿を実現させるための方策が求められる。現状の日々の教育（保育）活動を積み重ねたら，この姿が全て育ちますということならば，このような記載はされないはずである。一つの活動に一つの姿（力）が対応するとは考えられないが，複数の要素を含んだ活動の中で，その子に伸ばしたい姿（力）があれば，当然そこで支える保育者の言葉や働きかけも異なることになる。これまでの保育の多くはその辺りのことを全て保育者の個人技（経験値）として行われていた。保育協議も「さすが C 先生だ。あの子の姿をそんな風に見取って，～と言葉かけ（支援）していたのか・・・」という「答えありき」のものではなく，「あの時の対応は，あの子にとってどのような意味があり，そのために保育者はどのような言葉かけをすべきであったのか」をみんなで検討する，検討できるように変わっていかなければならない。

まとめとして，附属幼稚園の今回の研究方向はこれからの保育のあり方，研究の仕方の提案である。幼稚園教育要領の改訂とともに，保育者の子どもを見る目だけでなく，自らの教育行為を内省するための方法論の確立を目指して，筆者もともに努力していきたい。

（共同研究者：初等教育開発講座　川路澄人）

2016 年に改訂された幼稚園教育要領において幼稚園教育において育みたい資質・能力として「知識及び技能の基礎」，「思考力・判断力・表現力等の基礎」，「学びに向かう力，人間性等」の 3 つが明示された。これらは，小学校以降でも共通に育成されるものであり，幼稚園における保育内容がそれ以降の教育との一体化が図られることとなった。合わせて，「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」の 10 が明確にされ，それらを基に小学校との共有・連携が求められるようにもなった。

これまで日本における幼稚園教育は「遊び」を基礎においてきた。その前提は変わらないものの，小学校以降の教育で求められる「基礎」，すなわち「学習」の視点で遊びを構想していくことが期待されている。ただし，それは学習のための遊びであってはならないし，プログラム的に導入されるものであってもならない。幼児が遊びこむ中で学習の要素は確実に盛り込まれていくからこそそれを保障していくのである。

倉橋惣三は，幼稚園教育とは，幼児の生活を最大限に重視し，幼児の生活を生活として発展させていくものであると捉えた（『幼稚園真諦』）。そのために，「子供たちの自由感」を保障した上で，「何かしら子供の生活にまとまりを与え」，どの遊びを選ぶにしても「選んだものの中には必要な滋養価値——教育価値——がちゃんと配分されているようでなければ」ならないとした（倉橋 1953）。

附属幼稚園では，この「自由感の保障」については十分に実現できているが，生活のまとまりと教育価値については今後の研究課題となるだろう。例えば，八百屋を題材とするならば，八百屋が実際に営む生活や振る舞いがありのまま反映できていることを倉橋惣三は求めていた。幼児が取り組む遊びの対象について深く捉えることができているならば，それはおのずから学習となるのである。

（共同研究者：初等教育開発講座　深見俊崇）